

20231212 第 163 回運輸の日

12日、東神トラックステーションにて、第163回運輸の日を実施しました。今回の行動者は湘南地区連絡協議会のメンバー3人にて行われました。昨夜からの雨もやんだものの、気温は低い。そんな中での行動になりました。

ドライバーの皆さんへは、『2024年問題について企業から説明等ありましたか?』という設問。出だしは、「時間外労働について80時間を目安に対応しているの70時間くらいになると会社から知らせがある。労基に入られたからね。」と話してくれました。

あるドライバーには、「歩合なんで、時間を気にしたことがない。会社からは話もないので、どうなるのか?」と不安気に話してくれました。

また、仙台の方は、「会社は、長距離運行については、今後、やめていく方針のようだ。給料はあまり変わらないので。」と話してくれました。

皆さん!安全運転をお願いします。



行動者の感想



東神トラックステーションにて、運輸の日の活動を行った。

当日はあいにくの雨模様であったが、トラックステーションは満車状態で相変わらずの盛況であった。

当日は、「2024年問題が企業で話し合いがされていますか」という内容での活動だった。

実運送を担うドライバーの中では2024年問題は生活費に直結する大きな問題のため会社(所長や配車担当)に対して対応を聞いているようだが、「考えているから…」という返答があるだけだという声が多かった。

また中小企業が多く労働時間への対応や、収受する料金も課題が多いことがわかった。

従業員規模が5~10人程度の会社でなおかつ大手荷主の直接傘下に入れていない。労働組合もない企業では対応の取りようもないということがわかった。また労働組合結成の流れが出来そうになると、配車を外したり評価を下げたりといったこともあるようだ。

給与も歩合給の色が強くまた当人たちも同じ企業内で働くものでも、差を求める傾向が強く感じる。

トラックステーションの敷地内も相変わらずゴミが植込みに隠れるように捨てられており、まだまだ運転員のモラルの向上は先だという感覚をもった。携帯トイレなどを標準装備するか、運輸の日に配布できないものか。

標準的な運賃に関しても、ドライバーまで恩恵が回ってくるのはいつの時代になるのかもわからない状態というのが運転手たちの本音なのだと思う。

中小運送会社経営者の中にはまともな経営ができない人も多いのではないかと感じた。

志田 一宏(日新労働組合)



師走の冷たい風の中での行動となりました。

2024年問題についてのアンケートでは、会社の規模や運行形態などで対応が千差万別であることが浮き彫りとなった。特に小規模の会社では、会社から従業員に対して何も話がない中、不安を感じるという回答が多く、ケアの必要性を感じた。

2024年問題が目前に迫った状況でもこの状況という事で、どのような事態になるのか非常に心配になる結果となった。

轡田 光一(丸全昭和運輸労働組合)

本日で、1週間の行動が終了した。

今回の設問については、2024年問題として、メディアに取り上げられ、政府も手を入れてきた。

しかし、今に始まった『ドライバー不足』ではなく、気力のない産業にしてきたのは我々業界に働く者、そして、運営する者の責任は大きい。時間をかけてでも働かなければ生活ができない！逆にこれだけの賃金(時間外込み)があるから多少労働時間が長くても、総額では引けを取らないだろう～。一方で、危険との背中合わせであるドライバー職。3Kの職業に若者の就業は望めないものとなっている。若者のニーズに合わない職業になってしまったのではないか？

2024年までの移行準備期間が全く活かされずに今日まで来てしまった。今後、若者の就業がされていかなければ、本当に物が作れなくなるのはそう遠いことではないのでは？。経営者も労働者もそして消費者も早く気づいてほしい。

望月 博巳(県連)